

「初めに言があった」

(ヨハネ1:1-18)

挽地茂男

2018.12.2. 日本基督教団千歳丘教会礼拝

ある有名な説教家が、自分の若い頃の信仰を振り返って、自分はまるで教会にショッピングにやって来た客のようであった、と言っています。すぐれた説教、オルガンや聖歌隊や会衆による美しい賛美の調べ、暖かい交わり等々。しかしそれが得られないとき、彼の若くて旺盛な批判精神は、鋭く教会に向けられました。教会のかけているところを「欠点」として、さまざまな注文をつけたのでした。その点で自分は、いわば「宗教的商品」を物色する消費者となんら変わらなかったと彼は言います。後に彼は礼拝者のあり方としてその態度に対する反省と変化を、礼拝者の持つものの見方、視線や視点の変

化として表現します。つまり教会において彼は、まずは礼拝者として、「①上を見、②周囲(横)を見、③外を見て、自分の④内を見」なければならないと言います。「上」とは当然神のこと、「横」とは兄弟姉妹のこと、「外」とは社会のこと、「内」とは自分自身のことです。教会の説教も音楽も交わりも、わたしたちが神をあがめ、兄弟姉妹を愛し、社会に向かって証しをし、自分の内に信仰と愛と希望を育むための助け(補助)以外の何物でもない、と語ります。

今日からアドベントです。昨年
のアドベントからクリスマスにかけて、主にルカの福音書から、クリスマスに関連する「賛歌」を中心に聖書を読んでまいりました。4つの賛歌をご一緒に読みました。まず①11月(19日)には、洗礼者ヨハネの父ザカリアが聖霊に満たされて歌う「**ザカリアの賛歌**」(ベネディクトゥス:ルカ1:68-79)を読みました。②12月には、おそれ天使ガブリエルの受胎告知に虞と不安をいただくマリアが、同じくヨハネを宿したエリザベトを訪問し、彼女の心を占領していたおそれ虞と不安から神への信頼へと

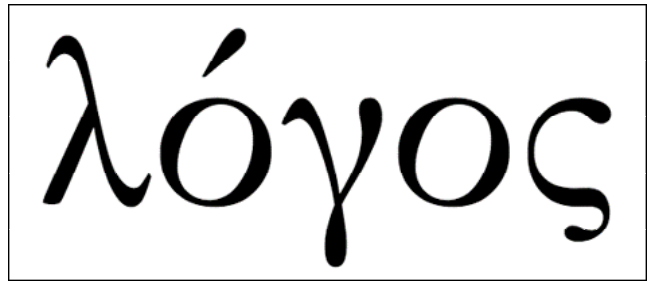


解放されて歌う「**マリアの賛歌**」
(マニフィカート：ルカ1:47-55、12月10日)、そして③夜通し野宿をしながら羊の番をする羊飼いに現れた天使の軍勢が歌う「**天使の賛歌**」
(グローリア・イン・エクセルシス：ルカ2:14、12月24日)、最後は④生まれた幼子イエスを主のものとして献げるために神殿に詣でた両親と幼子に出会った老人シメオンが、今こそ救いが現れた、と高らかに歌う「**シメオンの賛歌**」(ヌンク・ディミトゥス：ルカ2:29-32、12月31日)を読みました。福音書記者ルカは、まるで歌うような気持ちで主イエスの誕生の物語を書いているのです。



エル・グレコ「福音書記者ヨハネ」

さて今年のクリスマスには、是非とももう一つの賛歌、ヨハネによる福音書冒頭の「ロゴス賛歌」を一緒に読みたいと思います。「ロゴス賛歌」と申しましたけれども、今読みましたヨハネ福音書の1章1－18節には「言」という単語がたくさん出てまいります。ギリシア語で「言」のことを「ロゴス」と



言いますので、この箇所を「ロゴス賛歌」と読んでいるわけです。「ロゴス賛歌」は、最近の研究では、当時、実際に讃美歌として歌われていた可能性が高いと言われております。

カトリックのフランシスコ会が出しておりますフランシスコ会訳聖書ではこの箇所を、

① 1章1－5節を「賛歌1番」、
③ 1章9－14節を「賛歌2番」、
⑤ 1章16－18節に「賛歌3番」という小見出しをつけて、讃美歌として翻訳しております。そして「賛歌1番」と「賛歌2番」の間の② 1章6－8節に「洗礼者ヨハネの証し(1)」がはいり、「賛歌2番」と「賛歌3番」の間の④ 1章15節に「洗礼者ヨハネの証し(2)」が入っております。全体として「賛歌1番」「洗礼者ヨハネの証し(1)」「賛歌2番」「洗礼者ヨハ

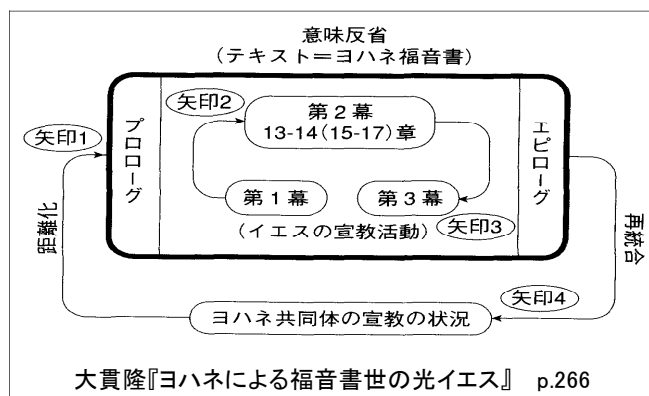


Leonardo da Vinci - San Giovanni Battista-

レオナルド・ダ・ヴィンチ「洗礼者聖ヨハネ」

ネの証し(2)」「賛歌 3 番」という、讚美歌とヨハネの証を組み合わせた（ダブル・サンドイッチ状の／ダブル・チーズバーガーのような）構成になっています。

このロゴス賛歌は、ヨハネ福音書の冒頭に掲げられているので、福音書全体の「前奏曲」とも考えられますし、またヨハネ福音書の重要なテーマが賛歌の中に出てきますので、「主題歌」（テーマソング）とも考えられます。またヨハネ福音書を読んでまいりますと、「ロゴス賛歌」で歌われていたことが、



ヨハネ福音書＝三幕のドラマ
三幕のドラマを包む福音書全体の構成

(P) プロローグ (1:1-18)

- (1) 第一幕 (1:19-12:50) 「世」に対してイエスが公然と遂行する啓示の業
- (2) 第二幕 (13-14章と15-17章) 暗い夜景を背景にして照らし出された最後の晩餐とイエスの告別説教
- (3) 第三幕 (18:1-20:29) イエスの十字架への歩み(受難)と復活のイエスの顕現と弟子の派遣
- (E) エピローグ (20:30-31)
- (A) 付録 (21:1-25)

物語に沿って思い起こされたりしますので、「背景音楽」「背景歌」(BGM)と考えてもよいわけです。いずれにしても、ヨハネによる福音書を理解するのに大切な箇所であることに違いありません。

では賛歌の 1 番です。本日は時間の関係で、この賛歌の 1 番しかお話することができません。1－5 節（言による創造）。

1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。

言は神であった。1:2 この言は、初めに神と共にあった。1:3 万物



は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

「初めに。」ヨハネの思想はいきなり壮大なスケールの描写で始まります。そこにはまだ世界も人間も存在しません、太陽と月の運行によって刻まれる時間も存在しません。つまりヨハネは、歴史の外へ、世界の外へとわたしたち(読者)を導きます。

「初め」とは、神が「天と地を造られ」る以前を指しています。わたしたちの視野は、現実の「今ここに」を離れなければなりません。また「初めに」という言葉は、旧約聖書の創世記と共鳴しています。旧約聖書の各書は、もともと現在のように「創世記」とか「出エジプト記」といった書名で呼ばれていませんでした。冒頭の出だしの言葉が書名がわりになっていたのです。ちなみに創世記は「ベレシート」(בְּרֵאשִׁית)、訳すと「初めに」。ヨハネは——当時の賛歌を使って——福音書の冒頭に創世記のイメージを喚起します。そしてこの創造の「初めに」存在したものは、世界でも人間でもはたまた時間でもない、「言」だと宣言します。

この「言」に暫しとどまります。

そのためにまず翻訳を一つ紹介します。現存する最古の日本語聖書として知られるギュツラフ訳の「ヨハネによる福音書」の翻訳



です。初版原本は1837年（シンガポール、堅夏書院〔アメリカン・ボード出版〕）のもので

そのロゴス賛歌1番を見たいと思います。この日本語訳を助けたのが、岩吉、久吉、音吉〔いわゆる三吉〕と言われる3人の少年たちでした。彼らは船員だったのですが、乗っていた船が遭難し、1年以上も漂流を続け、結局アメリカに漂着します。そしてインディアンに捕えられ、各地を転々としつつ日本に送り返されます。その途中、立ち寄ったマカオで、オランダ人宣教師ギュツラフの世話になり、そして、彼に日本語を教えながら、聖書の翻訳の手伝いをしたのでした。彼らは尾張の生まれでしたので、この訳にも当時の尾張の方言が反映しています。

ハジマリニ カシコイモノゴザル、
コノカシコイモノ ゴクラク(神)
トモニゴザル、コノカシコイモノ
ワゴクラク。ハジマリニ コノカ
シコイモノ ゴクラクトモニゴザ
ル。ヒトワコトゴトク ミナツク
ル、ヒトツモ、シゴトハツクラヌ、
ヒトハツクラヌナラバ。ヒトノナ
カニイノチアル、コノイノチワニ
ンゲンノヒカリ、コノヒカリハ
クラサニカ、ヤク、タ、シワセカ
イノクライ ニンゲンワ カンベン
シラナンダ。

細かい所はさておくとして、この翻訳では、「初めに言があった」の「言」「ロゴス」を「カシコイモノ」と訳しています。「ロゴス」を今風な英語にすれば「ロジック」です。「論理」「理論」「理性」です。「はじめに理性があった」すなわち「ハジマリニ カシコイモノゴザル」というわけです。「論理」とか「理論」と訳さずに「カシコイモノ」と翻訳されたために、そこには人格的な要素が備わりました。しかしそんな人格的な要素を「言」「ロゴス」に読み込んでもよいのでしょうか。無学な漁師の提案を信じたために、使い物にならない的外れな翻訳になってしまったのでしょうか。

実は、これは素人の荒唐無稽な翻訳ではなくて、旧約聖書の創造理解と通じているのです。箴言の8章です。そこでは知恵が世界の創造に参加します。12節と22-32節です。口語訳で紹介します。知



恵が語り手です。こう語ります。

8:12 知恵であるわたしは悟りをすみかとし、知識と慎みとをもつ。

〔中略〕8:22 主が昔そのわざをなし始められるとき、そのわざの初めとして、わたしを造られた。

8:23 いにしえ、地のなかった時、初めに、わたしは立てられた。8:

24 まだ海もなく、また大いなる水の泉もなかった時、わたしはす

でに生れ、8:25 山もまだ定められず、丘もまだなかった時、わたしはすでに生れた。8:26 すなわ

ち神がまだ地をも野をも、地のちりのもとをも造られなかった時で

ある。8:27 彼が天を造り、海のおもてに、大空を張られたとき、

わたしはそこにあった。8:28 彼が上に空を堅く立たせ、淵の泉をつよく定め、8:29 海にその限界

をたて、水にその岸を越えないようにし、また地の基を定められたとき、8:30 わたしは、そのかた

わらにあって、名匠となり、日々に喜び、常にその前に楽しみ、8:

31 その地で楽しみ、また世の人を喜んだ。8:32 それゆえ、子供らよ、今わたしの言うことを聞け、

わたしの道を守る者はさいわいである。

ここで知恵は、人格として語ります。知恵が人格をもてば「**カシコイモノ**」です。この知恵は自分自身を、神と共に世界を創った「**名匠**」たくみ匠だと言っています。そして知恵は最後に、世界を創ったこの知恵こそ、人々の歩みを正しく示すものであり、人はこの「知恵の示す道」に進むべきだ、と勧告します。

このような知恵は、やがて言と交換可能なものと理解されてゆきます。旧約聖書の続編に「知恵の書」と呼ばれる箴言と同じジャンル（知恵文学）の作品が残されています。その9章1－3節です。先祖たちの神、憐れみ深い主よ、あなたは言によってすべてを造り、知恵によって人を形づくられました。あなたが造られたものを人が治め、信仰深く、義に基づいて世界を支配し、公正な心で裁きを行うためです。

天地創造に参加する「言」と「知恵」とは交換可能なもの、同じものなのです。どちらも神から発するからです。知恵や言の人格性はどこから出てくるのかが分かります。「言」と

「知恵」が神に由来することを
知るとき、そこに人格的な働き



が伴うことが理解されます。そしてここでも、世界の創造に参加する言と知恵は、人間の生き方の基礎であることが、宣言されています。

もう一つ翻訳を紹介します。現代語訳ではあるのですが、山浦玄嗣（やまうら はるつぐ）さんという方がギリシア語から気仙沼方言に翻訳された、気仙語訳のヨハネ福音書1章1－5節です。



1 初(は^す)めに在ったの^ア

神様の思いだった。

思いか[°] 神様の胸に在った。
その思いごそ^ア神様そのもの。

2 初(は^す)めの初めに神様の
胸の内(う^ち)に在ったもの。

([□]は気仙語独特の発音であることを示す)

3 神様の

^{ここ}思いが凝って

あらゆる物^ア生まれ。

それ無^すに

生まれだ物^アー^{ひと}^ちもね^ア。



4 神様の思いに^ア

あらゆるもの^オ生が^す力(^ちから)^ア

有って、

それ^{まだ}^ア又、

生きる喜び^ィ人の世に

輝か^す光だった。

5 光^ア人の世の

闇^ィ照ら^すてだったのに、
闇に住^すむ人^アその事^{ごと}に
気^ア付^ちかね^アでだったんだ。

この翻訳では「言」「ロゴス」が「思い」と訳されます。〔この翻訳もロゴスという単語のもつ意味範囲内にあります。〕世界が創造される前に神の「思い」があったというのです。

「言」「ロゴス」に込められた神様の主体性や主観が前面に出てきます。「1:3 万物は言によって成った」という表現を、「神様のその思いが〈凝^こって〉〔煮^こごりの「こごる」、固まって？ 凝結して〕この世界のあらゆるものが生まれた」と訳します。かなり大胆な意識ですけれども、「言」「ロゴス」を神様の「思い」と訳した、発想の延長線にあるでしょう。この世界は神様の「思い」の現れ、人間という存在も神様の「思い」の現れ、神様はこの世界と人間に思いを寄せておられるというニュアンスを孕んでいます。

わたしたちは「言」「ロゴス」に関する考え方や理解を、旧約聖書成立の後期に属する箴言や知恵の書などの知恵文学や、ヨハネ福音書の翻訳に温ねてきました。これらの資料

は多くのことを教えてくれますが、まずわたしたちが参照しなければならないのは、「初めに」という言葉を取上げたときにも触れた創世記です。創世記の1章1－5節を参照しましょう。天地創造の第1日目を描きます。（私訳）

1 初めに神が天と地を創造した。

2 地は形がなく、何もなかった。

闇が大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。

3 そのとき、神が「光よ。あれ。」と言われた。すると光があった。

4 神はその光をよしと見られた。そして神はこの光と闇とを区別された。

5 神は、この光を昼と名づけ、この闇を夜と名づけられた。こうして夕があり、朝があった。
第一日。

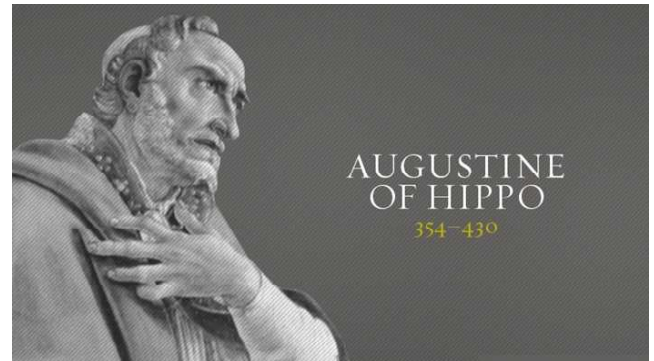


この創世記冒頭の1章1－5節を元にした変奏曲がヨハネのロゴス賛歌の1番は、と言ってよいでしょう。ロゴス賛歌は、旧約のテーマを凝縮し、それ引き継ぎ、新たな新約のテーマを展開させます。賛歌の1番と創世第1日の記事をつなぐ最も大切テーマは「言葉に

よる創造」です。創世記 1 章 1 – 5 節では。神さまが「**光よ。あれ**」**と言われると、光があった。**神さまの言葉の通りに、光が創造される。「あれと言われると…あった。」つまり「言による創造」が旧約聖書から新約聖書を貫く、世界の成り立ちに関する考え方、聖書の創造論（創造理解）の特徴なのです。ですからヨハネ福音書の 1 章 3 節で「**万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった**」と宣言されるのです。神が言葉を発すると、物や事実が生じる。神様においては、「言葉と事実が一つ」なのです。

ヘブライ語の言葉を意味する〈ダーバール〉という単語は、「言葉 word」という意味とともに、「事実 fact」という両方の意味を持っています。

万物は神の言によって創られました。ですから、当然、創られたものは神の言葉の性質を帯びるこ



とになります。アウグスティヌスは神を「大文字の言」**Verbum** とすると、神がお創りになった自然や人は小文字の言 **verbum** にあたると申しました。わたしたちは、**小文字の言葉を通して大文字の言葉を読み取る**ことが可能である。なぜなら神がお創りになった**被造物には神の言葉が書き込まれている**からだ、と言うのです。

去る9月15日に亡くなった樹木希林さんが晩年(2015年)に主演された「あん」〔第68回カンヌ映画祭のオープニング作品〕という映画があります。「あん」はお餅やお饅頭の「^{あんこ}餡子」の「あん」です。この映画ではどら焼きの「あん」です。

人の喧嘩の仲裁に入ったために、意図せず犯罪者になって服役し、その刑務所から出所し、どら焼き屋「どら春」の雇われ店長として単調な日々をこなしていた千太郎(永瀬正敏)。そのお店の常連である中学生のワカナ(内田伽

2) 創造者なる神

[creatio ex nihilo (無からの創造)]

①創世記1:1-2:3 万物の創造者

⇒神(創造者)は自然や人間(被造物)を超越する

「あれと言われると…あった」(言による創造)

神の言葉 → 事実 (言葉と事実が一体化する)

[ヘ] דבר (ダーバール) = 言葉 word, 事実 fact

⇒創られたものは神の言葉の性質を帯びる (ex. 詩編19:1-4)

「私達はこの世を見るために、聞くために、生まれてきた。」

この世は、ただそれだけを望んでいた。

…だとすれば、何かになれなくても、私達には生きる意味があるのよ。」

映画「あん」公式ページより

羅)。ある日、その店の求人募集の貼り紙をみて、そこで働くことを懇願する一人の老女、徳江（樹木希林）が現れ、どらやきの粒あん作りを任せることになります。徳江の作った粒あんはあまりに美味しく、みるみるうちに店は繁盛。しかし心ない噂が、彼らの運命を大きく変えていきます。彼女がハンセン病患者であったという事が人々に知れ渡ったのでした。客足がぱたりと止んでしまいました。完治もし伝染の危険も全くないのに、噂が流れたことで、徳江は、店から去らざるを得ませんでした。千太郎は彼女と心を通わせていた女子中学生・ワカナ（内田）とともに、その足跡をたどっていくことになります。

この映画の中で、あんこを作りながら、徳江（樹木希林）がその鍋に耳を傾けているシーンが出てきます。千太郎に何をしているのかと問われると、彼女は「小豆の言葉」を聞いているんだよ、小豆が生まれてここに来るまでの旅の

話を聞いているんだよ、全てのものには言葉が宿っているんだよ、と答ます。そしてこう言うのです。「私達はこの世を見るために、聞くために、生まれたきた。〔中略〕だとすれば、なにかになれなくても、私達には生きる意味があるのよ。」

「らい予防法」によって60年以上に亘って強制隔離されて家族や社会との接触を禁じられ、断絶を強いられ、社会のお荷物とされた人の、人生の意味を語る言葉です。森の木々や動物からも聞こえてくる、それらに目をやり、それらの言葉を聞く、何かになれなくても、それだ



けでもわたしたちには生きる意味がある、と静かに語ります。そしてそう語りかける言葉は、人が、自然ばかりではなく、人間の、他人の言葉に如何に耳を傾けないかを、静かに指摘しているのです。

〔原作者ドリアン助川氏はニッポン放送系列の深夜ラジオ番組「ドリアン助川の正義のラジオ！ジャンベルジャン！」のパーソナリティ。長年、若者たちの声に耳を傾けてきた。〕社会から隔離され、社会によって小さくされた人々の人生の旅の話を聞く耳など、人は持たないのです。この映画は、自己実現だけを人生の意味とする生き方に対して、自己実現の夢を見ることも、夢を育てる場所も奪われた人が、聞くことを通して、静かに自分の生きる意味を信じて、静かに生を全うしていく姿を描きます。人間は、言葉の深みをとらえられなくなっているのです。無言の言に籠もっているその思いに至る力を失っているのです。



パウロは、神が創られたこの被造世界を通して、神が明らかに示されている、と語ります。そしてそのように明らかに示された神を認められないことに「人類の罪」が現れていると厳しく断罪します。ローマの信徒への手紙 1 章 1 - 25 節。

1:18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。1:19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。1:20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。1:21 なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。1:22 自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、1:23 滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。1:24 そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせ

られ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。1:25 神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です、アーメン。

神はご自身の創られた世界を通して語り続けておられるのです。語り続ける神の思いが、御子イエス・キリストの誕生に込められます。語り続けて止まない神の心を、ヘブライ人への手紙 1 章 1 – 3 節は、こう語ります。

1:1 神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、

1:2 この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。

1:3 御子は、神の栄光の反映であり、神の本質の完全な現れであって、万物を御自分の力ある言葉によって支えておられますが、人々の罪を清められた(=十字架の)後、天の高い所におられる大いなる方の右の座にお着きになりました。神は人を通して語ります。自然を通して語ります。無言の言によっても

語ります。神は、御子イエス・キリストを通して語ります。イエス・キリストは肉となった神の「言」だからです。クリスマスは、神がその御子をこの世界にお与えになった日なのです。神様の「思い」がそのプレゼントに現れています。その「思い」は十字架にまで続いています。人に救いが必要だからです。その「思い」に心を寄せつつ、御子イエス・キリストの降誕を待つ、アドベントの最初の新しい第一週を歩み出したいと思います。祈りましょう。

2018.12.2. 日本基督教団千歳丘教会礼拝



© Can Stock Photo - csp17069003

1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

1:2 この言は、初めに神と共にあった。

1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。

1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

1:6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。

1:7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。

1:8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。

1:9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。

1:10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。

1:11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。

1:12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。

1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

1:15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。

「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」

1:16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。

1:17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。

1:18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

1:1 Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος.

1:2 οὗτος ἦν ἐν ἀρχῇ πρὸς τὸν θεόν.

1·3 πάντα δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ χωρὶς αὐτοῦ ἐγένετο οὐδὲ ἓν. ὃ γέγονεν

1·4 ἐν αὐτῷ ζωὴ ἦν, καὶ ἡ ζωὴ ἦν τὸ φῶς τῶν ἀνθρώπων·

1·5 καὶ τὸ φῶς ἐν τῇ σκοτίᾳ φαίνει, καὶ ἡ σκοτία αὐτὸ οὐ κατέλαβεν.

1·6 Ἐγένετο ἄνθρωπος ἀπεσταλμένος παρὰ θεοῦ, ὄνομα αὐτῷ Ἰωάννης·

1·7 οὗτος ἦλθεν εἰς μαρτυρίαν, ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός, ἵνα πάντες πιστεύσωσιν δι' αὐτοῦ.

1·8 οὐκ ἦν ἐκεῖνος τὸ φῶς, ἀλλ' ἵνα μαρτυρήσῃ περὶ τοῦ φωτός.

1·9 Ἦν τὸ φῶς τὸ ἀληθινόν, ὃ φωτίζει πάντα ἄνθρωπον, ἐρχόμενον εἰς τὸν κόσμον.

1·10 ἐν τῷ κόσμῳ ἦν, καὶ ὁ κόσμος δι' αὐτοῦ ἐγένετο, καὶ ὁ κόσμος αὐτὸν οὐκ ἔγνω.

1·11 εἰς τὰ ἴδια ἦλθεν, καὶ οἱ ἴδιοι αὐτὸν οὐ παρέλαβον.

1·12 ὅσοι δὲ ἔλαβον αὐτόν, ἔδωκεν αὐτοῖς ἐξουσίαν τέκνα θεοῦ γενέσθαι, τοῖς πιστεύουσιν εἰς τὸ ὄνομα αὐτοῦ,

1·13 οἳ οὐκ ἐξ αἱμάτων οὐδὲ ἐκ θελήματος σαρκὸς οὐδὲ ἐκ θελήματος ἀνδρὸς ἀλλ' ἐκ θεοῦ ἐγεννήθησαν.

1·14 Καὶ ὁ λόγος σὰρξ ἐγένετο καὶ

ἐσκήνωσεν ἐν ἡμῖν, καὶ ἐθεασάμεθα τὴν δόξαν αὐτοῦ, δόξαν ὡς μονογενοῦς παρὰ πατρός, πλήρης χάριτος καὶ ἀληθείας.

1·15 Ἰωάννης μαρτυρεῖ περὶ αὐτοῦ καὶ κέκραγεν λέγων, Οὗτος ἦν ὃν εἶπον, Ὁ ὀπίσω μου ἐρχόμενος ἔμπροσθέν μου γέγονεν, ὅτι πρῶτός μου ἦν.

1·16 ὅτι ἐκ τοῦ πληρώματος αὐτοῦ ἡμεῖς πάντες ἐλάβομεν καὶ χάριν ἀντὶ χάριτος·

1·17 ὅτι ὁ νόμος διὰ Μωϋσέως ἐδόθη, ἡ χάρις καὶ ἡ ἀλήθεια διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ ἐγένετο.

1·18 θεὸν οὐδεὶς ἑώρακεν πώποτε· μονογενὴς θεὸς ὁ ὢν εἰς τὸν κόλπον τοῦ πατρὸς ἐκεῖνος ἐξηγήσατο.